

第25期 日本語・日本文化研修コース [上級日本語特別コース]

(2005年10月～2006年9月)

初 山 洋 介

第25期上級日本語特別コースは、「上級レベルの日本語能力の習得（話す・聞く・読む・書くのすべてにわたって）」「日本に関する基礎的理解」「各自の専門分野の基礎的な研究方法の習得と実践」の3つを目標として行われた。

学習者は、9カ国、20名（中国：8名、インドネシア：3名、インド：2名、韓国：2名、モンゴル：1名、イラン：1名、タイ：1名、ポーランド：1名、イタリア：1名）であり（内1名（中国）は、研究レポートのみ受講）、8名の教員が指導に当たった。

以下、主要なプログラムおよびアンケートの結果などについて概説する。

(1) 教科書による日本語学習（10月～4月）

『現代日本語コース中級Ⅰ』『現代日本語コース中級Ⅱ』『現代日本語コース中級Ⅰ 聴解ワークシート』『現代日本語コース中級Ⅱ 聴解ワークシート』（いずれも名古屋大学日本語教育研究グループ編、名古屋大学出版会）を教科書として日本語学習を行った。補助教材として、「プリテスト（予習のチェック）」「プリテスト：補足（連語など）」「復習クイズ」「読解シート」「文法補足説明」を使用した。また、3課ごとにテスト（筆記テストおよび話すテスト）を実施した。話すテストについては、録音に基づき個別指導も行った。

(2) 入門講義・特殊講義（10月～7月）

日本に関する基礎知識を身に付けること、研究レポートのための基礎知識および基本的な研究方法を習得することを狙いとして、10月～1月（前期）および4月～7月（後期）の期間、それぞれ4つの分野の入門講義を12回（各90分）行った。前期は、「日本文化論Ⅰ」「国際関係論Ⅰ」「日本語学Ⅰ」「言語学Ⅰ」であり、後期は、「日本文化論Ⅱ」「国際関係論Ⅱ」「日本語学Ⅱ」「言語学Ⅱ」であった。なお、学生は、前期は4科目のうち2科目以上を選択、後期は4科目の

うち1科目以上を選択することとした。なお、入門講義は全学留学生が受講できるものであり、大学院研究生、短期交換留学生などとともに受講した。

また、特殊講義（必修）として「音声学」（90分×5回）を行った。

(3) 作文（研究レポートのための基礎訓練）（1月～4月）

研究レポート作成に必須の基礎知識を体系的に身に付けることを狙いとして、「書き言葉と話し言葉の基本的な違い」「論文・レポートに役立ついろいろな表現」「文末表現の諸相」「図やグラフの説明の仕方」「引用の仕方」「要約の仕方」などについて学習した。

(4) 発展読解（10月～4月）

発展読解として、新聞などの生教材の読解、本の読解（エッセイ・小説など、教員が用意したものの中から、学習者が興味のあるものを選択）、特別読解（学生が自分で読解の素材を用意し、学生主体で行う授業）などを行った。

(5) スピーチ（10月～7月）

自国の紹介をはじめとする様々なトピックについて、学生がスピーチを行った（1人、1回、10分程度、スピーチ後に質疑応答）。

(6) 研究レポート（1月～7月）

学生各自がテーマを決め、教員の個別指導のもとで研究レポートを作成した。分量はA4、15～30枚程度である。研究成果は『2005～2006年度日本語・日本文化研修生 研究レポート集』（460ページ）として発行した。また、中間発表会（5月、発表：25分／質疑応答：10分）、最終発表会（7月、発表：20分／質疑応答：5分）を実施した。研究レポートの題目は以下の通りである。

1. 郁楽倩（中国）「対中円借款変容の実態—第4次円借款以後を中心に—」
2. イステイクマ・ヤティ（インドネシア）「日本語の感謝表現の使われ方：ドラマ『太陽は沈まない』における感謝表現をもとに」
3. 鄔曉研（中国）「江戸川乱歩の怪奇とロマン—感覚を中心に—」
4. ガンボルド・テルゲル（モンゴル）「モンゴルと日本の外交関係樹立：当時における問題の分析」
5. 徐艶僑（中国）「類義語の意味分析—「コソコソ・コソソリ・ソット・ヒソソリ」を中心に—」
6. ゼイナブ・サドゥーギ（イラン）「日本語の別れの挨拶」
7. 于天鈺（中国）「辰濃和男「天声人語」からのメッセージ—社会的弱者と市民グループについて—」
8. 張善花（韓国）「近代文学に見る明治社会の様相—樋口一葉の「たけくらべ」に描かれた明治時代—」
9. 張若喩（中国）「松下 VS. ソニー」
10. テー ミナ（中国）「ニートから見る若者の就職問題」
11. 童江寧（中国）「豊語について」
12. 任潤蓮（中国）「若者ことばの使用状況及び若者ことばに対する感覚—アンケートに基づいて—」
13. パタリヤー・ジンタパイチャット（タイ）「宮崎作品における水の意味合い」
14. ハン アルム（韓国）「太宰治『人間失格』—主人公〈葉蔵〉の恐怖と破滅—」
15. プラフラ・プラカシ（インド）「日本人の「心」はどこにあるか—身体表現の視点から—」
16. マデュラ（インド）「金子みすゞの創作活動に影響を与えた人々」
17. ミランティ（インドネシア）「日本の赤色」
18. メイフィ パンゲラパン（インドネシア）「インドネシアにおける日本語の「話し言葉」の知識—縮約形から見ると—」
19. ヤムロズ・トマッシュ（ポーランド）「禅と無印良品」
20. Cereda Davide（イタリア）「「かわいい」から逃れられない日本人」

(7) 総合演習（5月～7月）

日本事情・日本文化に対する理解を深めることと上級レベルの総合的な日本語力を養成することを狙いとして、総合演習を行った。教材は新聞や雑誌の記事、テレビ番組などを使用し、学生は多様な言語活動を

行った。テーマは「観光：名古屋のさらなる発展のために」「ことばで伝える、ことばで遊ぶ」「日本人とスポーツ：心技体の世界」の3つである。各テーマの実施期間は1～2週間である。

(8) その他

以上に加えて、独話練習、討論会（ディベート）、ことばのクラス（ゲームなどを通して日本語力を高めるプログラム）、定期的な漢字テストなども行った。さらに、本学の学部生向けに開講されている教養科目の1つである「留学生と日本：異文化を通じた日本理解」にも参加した。

(9) アンケート

2006年9月に、学習者に対して、コースの内容などに関するかなり詳細なアンケートを行った。以下、「全体としてコースの内容に満足していますか」という質問のみについて、アンケート結果を紹介する。

満足度	満足していない		満足している	
評価	0	1	2	3
回答者数	0人	3人	10人	5人

(10) 今後に向けて

昨年度に引き続き、研究レポート作成について簡単に述べる。今期は、従来通り、学術論文に準じる執筆形式をとる研究レポートを必修課題とした。しかし、コース終了後、担当教員による話し合いの結果、来期は、以下の4つのカテゴリーの中から学生が選択できることとした。なお、4つのカテゴリーの総称として「レポート」を用いる。

1. 論文（日本人学生の卒業論文に相当するレベル）
2. 調査報告（フィールドワーク（インタビューなど）に基づく報告など）
3. 随筆・エッセイ（紀行文、旅行記など）
4. 創作（小説、詩、和歌、俳句など）

まだ、試行錯誤の段階であるが、学生各自が自分にあったカテゴリーを適切に選び、熱心に取り組み、優れた成果をあげることを期待している。指導する教員にとっても、これまでの研究レポート指導の場合とは異なる工夫が求められることになる。この「レポート」というプログラムが有効に機能するように、中期的なスパンで検討していきたい。